

平成 21 年 5 月 29 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2005～2008

課題番号：17520441

研究課題名（和文） 日本中世生業史の研究 「農業／非農業」の二項対立論を超えて

研究課題名（英文） Study on the History of Subsistence Activities in Medieval Japan

研究代表者

春田 直紀 (HARUTA NAOKI)

熊本大学・教育学部・准教授

研究者番号：80295112

研究成果の概要：本研究の目的は、生業史の方法論を、日本中世を対象にしたモノグラフを通して具体的に提示することにあった。理論的検討では歴史学における生業論の登場と展開を跡づけ、生業史研究の意義と射程を明確に示した。実証研究では、生業と深く関わるモノのデータから、モノがとり結ぶ社会の特質や、生業を成り立たせ変化させる時代の条件を明らかにした。現地調査では、生業の存立基盤である共同体と環境利用システムを復元的に考察した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	800,000	0	800,000
2006年度	600,000	0	600,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,500,000	330,000	2,830,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：中世史、生業史

1. 研究開始当初の背景

従来の歴史学は生業をもっぱら分化したものとして扱ってきた。その背景には二つの要因がある。一つは、生業の問題を社会的分業の視点で捉えてきたため。その結果、生業史研究は農業史・林業史・漁業史・商業史など分野ごとの産業史に委ねられ、研究の個別分散化が進んだ。第二の要因は、文書史料の制度的性格にある。中世史では、稲作の水田、水田以外の耕地としての畠地、山野河海における多様な生業、をそれぞれ対象にした研究が併存しているが、これは荘園制的な地目設定という支配の枠組みのまま実態を読み込

んだ結果による。土地の主たる用途である地目のみを扱う実態論からは、複合生業的な理解は生まれてこない。こうしたなか網野善彦は、社会の発展に副次的な役割しか果たさないとされてきた諸生業に正当な評価を与えたが、彼もまたこれらを「非農業」という概念で括り、「農業」と対置したために、生業の相互関連が問われることはなかった。

しかし、民俗学の安室知がいうように、生計活動の実態は各種生業技術の選択的複合の上に成り立っていたとみるべきである。この複合生業の視点を持たなければ、時代・地域による環境適応の多様性や地域社会の有

機能的な構成は論じることができない。本研究は、複合生業の視点を歴史学に導入する新たな試みと位置づけられる。

2. 研究の目的

以上の研究状況をふまえ、以下の三方向から研究課題に取り組む。

(1) 制度論・史料論：制度史料から生業情報を的確に引き出すためにも、生業の場と産物を特定の地目と負担とに置換して捕捉する荘園制のシステムを解明する。捕捉の方式は支配の手段たる文書の形態と機能に現れるから、史料論的検討が有効。このアプローチから、土地制度・税制・政策などが生活世界から照射されることが期待される。

(2) 資源・産物の中世的形態論：生業と深く関わるモノのデータを個別に集積することで、それぞれが中世社会で果たした固有の性格を明らかにする。モノの一貫した追究を通して、モノを扱う生業やその担い手の論理を析出することができよう。

(3) 現地調査：生業複合の実態の復原をするためにモデル地域（若狭湾・琵琶湖・阿蘇カルデラ・宇土半島）を設定し、現地調査を実施する。中世史料から抽出し総合した生業データを、自然科学的な環境分析や古老の環境認識などから再検証する手法をとる。地域や時代による生業複合パターンの違いを示し、その背景に迫っていききたい。

3. 研究の方法

(1) 生業史研究の方法に関する理論的検討：本研究を開始するにあたり、歴史学への生業論の導入に際しての理論的検討を行う。その際、生業論の立場から環境史研究や山村史研究の視点と方法についても問題を提起していききたい。

(2) 土地台帳記載データの史料論的検討：制度史料から生業情報を引き出すことを目標に、土地台帳に記載された数値や情報の意味連関を解析し、地名の語彙分析を試みる。

(3) 中世生業語彙データベースの作成と活用：中世の日記記事を対象に、生業に関わる語彙を収集し、データベースを作成する。その完成後はデータの内容分析を行い、儀礼・宴会・行事ごとの有用品とその移動形態、資源・産物の供給・需要の季節性、資源・産物の流通・生産条件、生業を介した社会関係を明らかにしていく。

(4) 現地調査：以下の手法による調査を実施する。現在行われている生業・環境利用の参与観察による記録化作業。生業の存立基盤であるムラのしくみと環境利用システムに関する、聞き取りなどにもとづく復原調査。

歴史地名（環境認識語彙）の可視化作業に向けての現地踏査。

4. 研究成果

(1) 歴史学における生業論の理論的検討：研究開始の初年度には、歴史学への生業論・環境論の導入に際しての理論的論文を2本発表した。まず、「文献史学からの環境史」では環境史という研究課題が文献史学に与える問題の所在と、文献史料を用いた環境史の研究手法を示したが、そのなかで従来の歴史学による生産力評価を生業の営み全体から見直す必要性をとくに強調した。次に山村の歴史学的理解にむけての課題を提示した「歴史学山村論の方法について」では、複合生業のあり方を異にする平地村と山村との対置的な関係が形成される歴史的過程の究明を主要な課題として掲げた。

歴史学における生業論の登場と展開については、日本中世・近世史の研究にそくして「生業論の登場と歴史学」で跡づけた。さらに、歴史学の生業概念を自然から資源を獲得する営みである生業、百姓・村の成り立ちの基礎にある生業、全体社会の構成要素としての生業、の3点に整理し、各観点ごとに残された課題を明示している。

(2) 生業史研究のための史料論的考察：制度史料から生業情報を引き出すためには、土地帳簿などに記載された数値や情報の意味連関を正確にとらえることが不可欠となる。この作業を荘園土地台帳を対象に試みたのが、『日英中世史料論』に収録された拙稿「荘園土地台帳の内と外」である。本書は日英の中世史研究者が協同で開催したシンポジウムが基になっており、報告者の研究も国際的な学問交流の産物ということが出来る。

ところで、生業の観点はこうした文献史料が示す情報の限界を照らし出すと同時に、文献史料がもつ潜在能力にも目を向けさせる。「文献史学からの環境史」では潜在能力を生かす方法として、地名語彙の分析を掲げた。地名の語彙の組み合わせから、名付けた人間の環境認識や、その場所を利用した生業活動などを復原していくという方法である。菊池市の歴史地名を対象にしたこの方法による成果は、口頭報告「現代景観の古層をさぐる」で発表した。

(3) 中世生業語彙データベースを活用した研究成果：魚介類を対象とした考察については、琵琶湖博物館の展示「琵琶湖のコイ・フナ物語」の企画に参加し、関連のシンポジウムで「魚食からみた中世の漁撈」と題する報告を行った。15世紀の日記記事物品データを活用した研究成果は、2007年度日本史研究会大会シンポジウム「15世紀を問う」で口頭報告し、その内容を成稿した論文「モノからみた15世紀の社会」を発表した。いずれの研究においても、生業を成り立たせる時代的条件とその変容を、消費社会の動向から解き

明かす議論を提出している。消費から生業が媒介する全体社会の問題にアプローチする研究は歴史学では未開拓であり、そうした研究に先鞭をつけたところに本研究の意義を認めることができよう。

(4) 現地調査にもとづく研究成果：本研究では各年度に現地調査を実施し、研究成果に反映させた。まず、菊池市小木地域で山間地域の景観と生業の復原調査を行い、その成果をもとに「近世後期における山間地域の景観と土地利用」を発表した。菊池市では平成18年度以降、原・下河原両地区で環境認識語彙の可視化作業に向けての現地調査を実施し、その成果の一部は口頭報告「現代景観の古層をさぐる」で発表した。その他、有明海水系では伝統漁法、佐賀平野ではクリーク利用、阿蘇では草原資源の利用・管理実態に関する現地調査も行っている。阿蘇の調査成果は、「阿蘇北外輪山の空間利用史」と題して口頭報告した。

また、阿蘇市小野田地区では平成18年度から3年間、生業の存立基盤であるムラのしくみと環境利用システムに関する、聞き取りなどにもとづく復原調査を実施し、その成果は報告書『阿蘇谷中央のムラの営みと歩み』に集成して公表した。

(5) 国際的な研究発表：本研究の国際的な研究発表の機会としては、2005年7月に国際中世学会（英国リーズ大学）で発表した「By-Laws : Records of Legal Control on the Environment in Medieval Japan」を挙げることができる。本報告では村掟を素材に、自然の時間的リズムに応じた生業秩序とその崩壊過程について論じ、英国の中世史研究者と意見を交換した。

(6) 研究成果の社会還元：本研究の成果は専門分野の学術雑誌に投稿するとともに、一般公開のシンポジウムや（くじゅう・阿蘇草原シンポジウム、シンポジウム「東アジアにおける生き物と人」）、市民向けセミナー（「阿蘇の文化遺産」熊本大学附属図書館・熊本県立美術館共催）で講演することにより、社会一般への研究成果の還元もはかった。また、現地調査の地元協力者を対象にした成果報告書の配付と報告会も、2009年6月に阿蘇市で実施する予定である。

(7) 今後の展望：本研究のうち、「モノからみた15世紀の社会」で示した動植物観の問題と、「By-Laws : Records of Legal Control on the Environment in Medieval Japan」で論点開示した「中世の自然と時間」について、さらに地名語彙分析による環境認識の復原に関しては、平成21年度から5年間とりくむ科学研究費研究（基盤研究C）「自然観の歴史的多様性と変容に関する研究」で継続して研究を進めていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

春田直紀、モノからみた15世紀の社会、日本史研究、546号、pp.22-45、2008年、査読有

三輪貴史、春田直紀、近世後期における山間地域の景観と土地利用 肥後国菊池郡白木村を中心に、熊本大学教育学部紀要、55号、pp.11-30、2006年、査読無

春田直紀、By-Laws : Records of Legal Control on the Environment in Medieval Japan, *The Haskins Society Journal, Japan*, vol.1, pp.7-11、2005年、査読無

春田直紀、歴史的山村論の方法について 民衆史研究会 2004年度大会シンポジウムによせて、民衆史研究、70号、pp.1-17、2005年、査読有

春田直紀、文献史学からの環境史、新しい歴史学のために、259号、pp.9-31、2005年、査読有

〔学会発表〕（計8件）

春田直紀、現代景観の古層をさぐる 地名語彙分析からのアプローチ、総合地球環境学研究所 N E O M A P 景観ワークショップ、2009年3月12日、総合地球環境学研究所（京都市）

春田直紀、阿蘇北外輪山の空間利用史 文献・絵図からたどる過去600年、くじゅう・阿蘇草原シンポジウム、2008年9月13日、国立阿蘇青少年交流の家（阿蘇市）

春田直紀、モノからみた15世紀の社会、日本史研究会大会全体会シンポジウム、2007年10月13日、立命館大学（京都市）

春田直紀、魚食からみた中世の漁撈 コイが魚の王様だった時代、シンポジウム「東アジアにおける生き物と人 これからの関係を探る」、2007年7月28日、滋賀県立琵琶湖博物館（草津市）

春田直紀、モノからみた15世紀 学説整理と残された課題、日本史研究会7月例会、2007年7月8日、機関紙会館（京都市）

春田直紀、生き物と地名 阿蘇の芹地名を中心に、生き物文化誌学会第4回学術大会ワークショップ「生き物と景観」、2006年6月2日、東京農業大学オホーツクキャンパス（根室市）

春田直紀、中世阿蘇社の地域編成 社役・公田・帳簿、大阪市立大学日本史学会2006年度大会、2006年5月13日、大阪市立大学（大阪市）

春田直紀、By-Laws : Records of Legal Control on the Environment in Medieval Japan, International Medieval Congress

2005 (2005 年度国際中世学会) 2005 年 7 月 13 日、リーズ大学 (連合王国)

[図書] (計 4 件)

春田直紀監修、熊本大学教育学部日本史研究室、阿蘇谷中央のムラの営みと歩み 熊本県阿蘇市大字小野田地区の現地調査、2009 年、pp.1-105

鶴島博和・春田直紀編著、日本経済評論社、日英中世史料論、2008 年、pp.1-397

春田直紀 (共著)、国立歴史民俗博物館編、吉川弘文館、生業から見る日本史 新しい歴史学の射程、2008 年、pp.191-211

春田直紀 (共著)、熊本大学附属図書館、阿蘇の文化遺産、2007 年、pp.41-59

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

春田 直紀 (HARUTA NAOKI)
熊本大学・教育学部・准教授
研究者番号：8 0 2 9 5 1 1 2

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

大村 拓生 (OHMURA TAKUO)
大阪工業大学・情報科学部・講師
研究者番号：2 0 3 8 2 0 2 0